

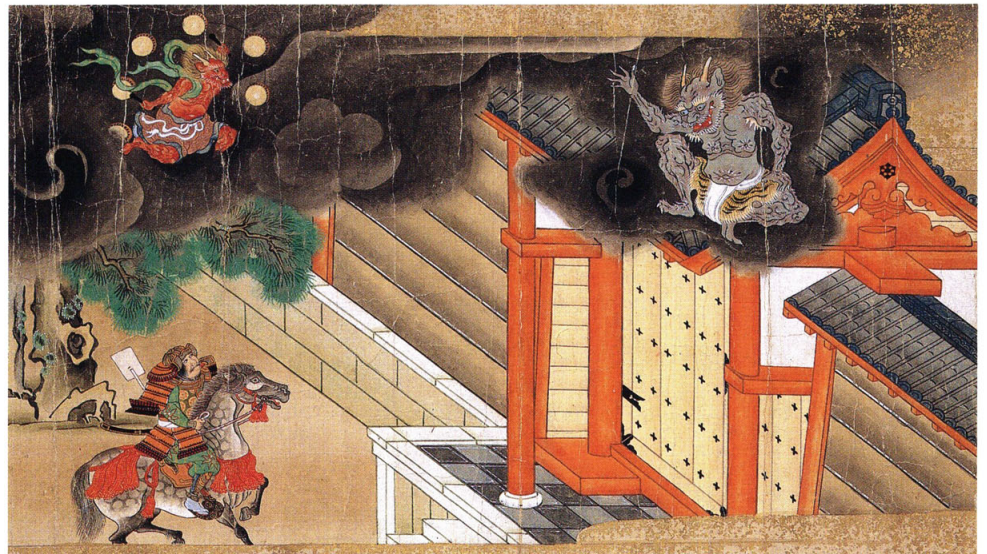
8 羅生門絵巻

二卷

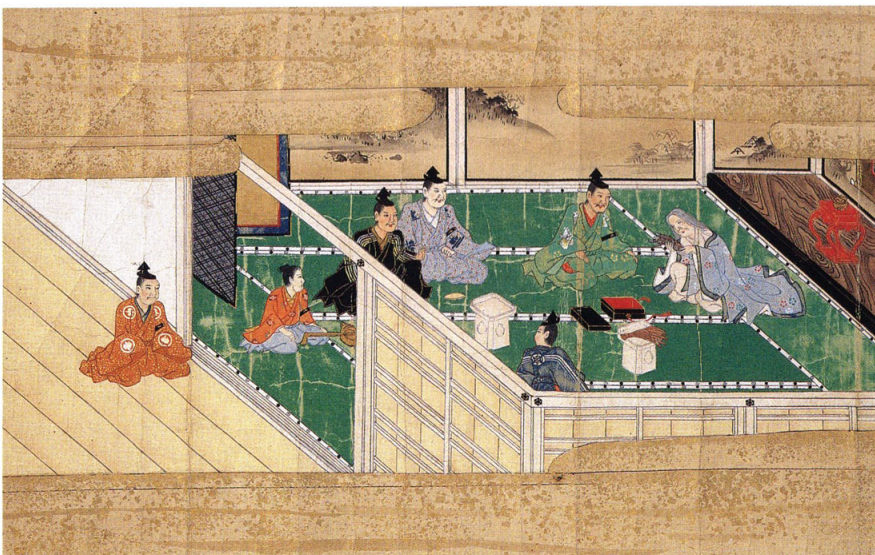
紙本着色 江戸時代(十七世紀)  
縦二七・五〇二七・七  
長一八七・四〇一五・四七

室町時代中頃に成立したと考えられる御伽草子系の物語で、源頼光の武勇伝の一つである。展示番号3で紹介した「酒伝(天)童子絵巻」の統編的なもの。大江山(当館の絵巻の場合は伊吹山)の鬼退治から戻った後のある夜、酒宴の席で藤原保昌が、大江山の鬼童子の眷属の鬼が都の羅生門に住みついて通行人を悩まして、と話した。そこで頼光らはそれを確かめに出かけ、膝丸という太刀で鬼の腕を切り落すが、帰途奪い返される。この後頼光が病にかかるが、大和国宇多の森に住んで人を悩ましている鬼を退治すれば直るといので、渡辺綱が赴いて美女に変装して現れた鬼の手を髭切という太刀で切り落して持ち帰った。そして、頼光は鬼の手を櫃に入れて蔵に納め、仁王経を唱えて封じた。その五日後、鬼は手首を取り戻そうと、頼光の母の姿に変化して尋ね来るが、頼光は髭切で討ち果たす。膝丸と髭切の太刀は、鬼丸・鬼切と名付けられて、源氏の家宝とされた。

本絵巻は上下の二巻、上巻七段、下巻九段の計十六段で構成されている。詞書は一筆、描写は粗くはあるが描きなれた絵師によると考えられる。詞書の料紙は金泥絵で装飾し、段ごとの詞書末には散らし書きの様な書き方が見られる。近世絵巻が量産化され始めた時期のものと推察され、十七世紀後半の制作と考えられる。



羅生門の鬼退治に向く 上巻第5段



宇多の森の鬼、斬り落とされた手首を取り返すため、頼光の母の姿となって訪れる 下巻第7段

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近世絵巻の興起―物語り絵の諸相

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 16

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 大塚巧藝社

翻訳 鶴岡厚生

発行 宮内庁

平成九年七月五日発行

© 1997, Museum of the Imperial Collections